
これはぞんびですか？～はい、二次創作です～

日向 剛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

これはゾンビですか？はい、二次創作です

【Nコード】

N2581Z

【作者名】

日向 剛

【あらすじ】

木村心一先生の『これはゾンビですか？』の作品の二次創作物です。著者の日向剛の視点から原作を読み取り、こんなシチュも見てみたい、という願望を表したものです。どうか、肩の力を抜いて、適当に読んでください。原作との相違が間違いなく出ると思うので…
日向剛のオリジナル作品『CHAOS』のキャラも参戦予定。
こいつらは完全オリジナルの為、あまり気にしないで下さい笑い

「はい、説明書です」

「こんにちは、相川歩です。このお話は木村心一先生の『これはゾンビですか？』の二次創作の話です。話の辻褄等が合わないかも知れませんが、ご了承ください。…後、俺、ゾンビっす。それと…魔装少女っす」

「アユム、誰と話してんの？」

俺が読者の人達に話してる最中にアホ毛とちっこいのが特徴の魔装少女、ハルナが声をかけてきた

「この二次創作物を読んでくれる人にだよ」

「ふん。ま、ハルナちゃんの魅力は木村先生にしか伝えらんないから、しゃーなしだな！」

…言ってる意味が分からないが、ご機嫌なのでよしとしようか

『歩。次は、私』

俺の隣でメモ帳を見せてくるのが西洋のガントレットにプレートアーマーを身に付けた銀髪の少女、ユークリウッド・ヘルサイズ。冥界から来て、俺をゾンビとして蘇らせてくれた人だ。常にこの服装の理由は自分の魔力を抑える為で…

『歩、それは、オリジナルの作品で語ってもらえればいい』

…さいですか

「さて、他にも色々な奴等が居るが、それも追々出てくるから、その時にでも紹介するので、そんな感じをお願いします」

「んじゃ、二次創作だっけ？の『これぞん』始まりだかんっ！ハルナちゃんの活躍、期待しろよなっ！」

『あまり、期待はしたら駄目』

くおつ、別小説(いせかい)から来たぜ！

「…今日は一段と太陽が敵だなあ…こんな日は建物中に居たいんだが…」

「おいバユムツ！そんな所でだらだらしないで手伝えよな！」

「…ハルナ、俺はゾンビだ。この天気の中そっちに行ったら干からびちまう」

「ったく、しゃーなしだな！葉っぱの人、それに根暗マンサーにユキノリ！手伝えよな！アユムがこっちこれないってゆーから、影に移すんだ！」

「…こんにちは、相川歩です。今俺たちは外で焼き肉をやってます。」

「…なんでかって？いやあ、最近福引きに行ったら三等の景品が『高級カルビ五人前』が当たって、今日五人で食べるって話になったんだ。その五人は誰かと言うと…」

「よし、動かせた！おいバユム！ここなら食えるな！」

先陣切って色々やってるアホ毛が目立つ小さい子が天才魔装少女で居候、ハルナ。実際焼き肉をやると言い出したのもハルナだ

「歩の為に何かをしようとすること自体気持ち悪いのですが…ヘルサイズ殿がやるなら仕方ありません」

次はポニーテールに束ねた長い髪に、とても大きい胸が主張するだけ主張してるナイスバディガール、セラフィム。基本的に彼女も居候ではあるが時々吸血忍者の里に帰ってる。…それにしても、やはり嫌われてるなあ俺

「んなこと言うなよセラフィム」。相川はいい奴なんだからよあ」

「メールにっってはでしょうが、私に取っては気持ち悪さしかありません」

「むう」

セラの隣で話してる隠れ巨乳は同じ吸血忍者のメールシュトローム。とてもボーイッシュで里以外では基本吉田友紀と言う名前なのだが

周りから『トモノリ』と呼ばれてたりする

『歩、早く焼く。お腹空いた』

「うう、ユー、お腹空いちやったあ。早く焼いて??」

そして西洋のガントレットとプレートアーマーを装着した美少女が冥界のネクロマンサー、ユークリウッド・ヘルサイズ。彼女も俺を蘇らせた後、家に居候してきている。こんな美少女に囲まれながら生活するなんて事、少し前までは考えなかったなあ…

『歩??』

「…ああ、悪い。今焼くからな」

そして一家(+トモノリ)の五人で焼き肉を食べ、片付けをしていた時だった

「アユム！メガロだ！」

「何？」

ハルナがアホ毛をピンと立たせ、俺を呼ぶ。…そのアホ毛はレーダーか

「ここから距離はどれくらいある？」

「多分町中だ！メガロめ、アタシの町を壊しちゃただじゃ済まさないかな！」

いや、お前の町じゃないだろ

「…分かった。悪いが皆、片付けを任せた。セラ、皆を頼む」

「分かりました」

俺はセラに片付けと皆を任せ、町中へ向かう

「…これは、なんだ？」

歩が来た場所には既に倒れたメガロが一匹いただけだった。だがどうも変だった。本来メガロは倒されると消えるはずだったのだ

「アユムーっ！」

そこにチェーンソーを持ったハルナも来たか、ハルナも倒れているメガロを見て目を丸くしている

「こいつはA級メガロ『ゴリラン』だ！こいつをこんなにするなん

て、アユムもやるな!？」

「いや、俺が来たときにはもうこの状態だった。むしろ変じやないか?メガ口って確か倒したら光になって消えるんじゃないか?」

「そうだな!じゃあなんで?天才でも分からないぞ!？」

ハルナがアホ毛を(?)にさせて悩んでいた。正直俺も分からない。俺以外にこの町で戦えるような奴と言えば、セラの上司の吸血忍者、サラス。冥界人間のネネさん。後は今は投獄されてる筈の京子。それに俺の担任のお酒を飲まないときはおっさんのクリス。だがそいつらの姿が見えないと言うことは…誰だ?

「…よっこらせつと!」

下から不意に声がしたかと思うと、メガ口の中から人が現れた。メガ口はそのまま光となって消えた。どうやら瀕死だったらしい

「やい!そのバンダナ!お前誰だ!？」

ハルナがいきなり啖呵を切り出した。おいおい、仲間かも知れないのに…

「…誰だつていいだろ」

はい、俺の考えが間違えてた。こいつ感じ悪い

「なあ?随分冷たいようだが、君が誰だか俺は知りたい。…あ、俺は相川歩。この町の人間だ。そしてこいつがハルナ。ヴィリエつてとこの天才魔装少女だ」

「そうだ!この天才にその態度はおかしいぞ!」

ふんぞり返るハルナ。いや、お前が今ふんぞり返るところじゃないだろ

だが相手のバンダナが特徴の男は表情を緩めない。それどころかさつき納めた刀をまた抜いてしまった

「…一介の民間人が、何故わざわざこんな所に来る?それにその女も魔装少女…だったか?そんな感じなのか?」

ん?なんか今一瞬フランクにならなかつたか?

「だったらその証拠を見せてやる!びびんなよ!」

そしてハルナはチェーンソーを持ち、呪文を唱える!

「ノボブヨ、オシ、ハシタワ、グンミーチャ、デー、リブラ！」

そしてハルナは魔装少女に変身した。相手の男は口を緩めていた。
…笑ってる？

「俺の世界でも、似たような事が出来るぜ？」変転詞、焰”！！」
すると相手の男は炎に包まれると、目が赤く変わる。刀には炎がま
とわり、ゾンビの俺には非常に迷惑だった

「…ハルナ！もうやめろ！」

俺はハルナを制止する。そりゃそうだろ！？ハルナが相手を本気に
させたんだから、俺がやるしか…

「なんだ、それも魔装錬機なのか？」

ハルナ食いついたーっ！？いや、でも相手は…

「…だが、こつちの能力もなかなかいいもんだな」

えー、相手もハルナに食いついちゃったよ…なんだよこの展開…

そして少し話をしたのち…

「ああ、それじゃあこれはこの世界の魔力なのか」

「そうだ！それを天才は具現化してるんだ！すごいだろ！敬えよな
！」

…仲良くなっちゃった

「あ、あの…」

「ん、お前…ハルナ曰く、ゾンビだな？」

「は、はい…」

「すまないな、俺もこつちに来てから日は浅いが、なんか無闇に敵
を叩いてた気がする」

そして相手が握手を求めて来たので、とりあえずは握手を返す。す
ると相手は俺に身体を預けてきた。そいつの胸からは血が滲んでいた
「っ！？お前…っ！？」

「…もらいすぎた…みたいだ…ちょっと…あまく見てた…」

「ハルナっ！」

「なんだよバユムッ！」

「こいつを運ぶぞ！手伝え！」

「…しゃーなしだな！アユムを手伝ってやる！」
そして俺とハルナはこの男を家に運んで行く

「…」

「セラ、どうだ？」

「いちいち話しかけないで下さい、気持ち悪い」

「相変わらず手厳しいな…。いや、とりあえず教えてくれ？」

家について、セラやユーたちにも手伝ってもらって男を今は寝かせてる。とりあえず交代で容態を見ると言うことで、今はセラが看ていた

「…正直、これ程の傷はそうそう生易しい戦闘ではつきません。この傷は本当にメガロがやったのですか？」

「それは正直俺にも分からない。メガロの下から現れたくらいだからな」

「…それにこの男、普通ではない」

「…ああ」

あの場に居なかったセラが普通じゃないとすぐわかるって事は…吸血忍者か冥界人か？

「ですが、吸血忍者では無いでしょう」

さも当たり前のように否定するセラ。俺はそれを何故か訪ねる

「なんでだ？こいつも刀を…」

「彼は何かの物質を刀に変えてるわけではない、本物の刀に力を集めている…それは吸血忍者の里には伝わってない力です」

「…だとすると、他の二人にも聞かか」

まず一人目…ハルナ。あいつは部屋に居た

「おいハルナ、ちよっといいいか？」

「…」

ハルナは何か考えてるようだ。…心当たりがあるのか？

「あの男…知ってるか？」

「んや、知らない。知らないけど…ん〜」

ハルナはアホ毛が？になっている。ただ、何か心当たりはありそうだな

「よしハルナ、何か分かったら教えてくれ」

「ん！」

そして…ユー。

あの力は特殊。もしかしたらユーにもあんな事が出来るんじゃないか？と思い聞いてみる

「なあユー、あいつは冥界人か？」

「わからない」

無表情のままに見せるが、どうやらユーも真剣に心当たりを探しているようだ。そうこうしていると、部屋からセラが出てくる

「ヘルサイズ殿、変わっていただけですか？」

『合点』

…なんでそんな言葉をあえてチヨイスしたんだよ、ユー。と、セラはそのまま家を出る準備をすました

「どこ行くんだ？」

「吸血忍者の里へ。もしくは頭領が知ってるかもしれないからね
セラも随分興味を示してるな…何でだ？」

「ああ、じゃあ情報収集頼むな？」

「分かりました。…行ってきます」「はいよ」

そしてセラを送り出した直後、入れ替わる様に女の子が現れる

「あくいかわ！」

「トモノリか、どうした？」

先程一緒に居た友紀が家に遊びに来た。先程と同様黒のタンクトップに短パン。…随分とアグレッシブですこと、胸とか

「師匠から聞いたぜ？なんか男が倒れてたんだって？」

「ん？あ、ああ」

ハルナが友紀に聞いた…何でだ？普通ならハルナは大先生に聞けばいいのに

「んでさ、料理作れば目覚めたときにすぐ打ち解けられるだろうっ

て、オレを誘ってくれたんだ！師匠はいい奴だよな！」

…ふうん、ハルナ、近い人間が現れたからなんとか知りたいたんだ、そして友達になりたいんだな。俺はこのときあの男に少し嫉妬していた。皆がああ男にばかり関心を示していたが、理由はそれか…。なら嫉妬しても仕方ないか

「ああ、いい奴だ。なんてつたつて天才だからな！」

「まあ、相川もめっちゃいい奴だけだな！」

「俺？俺は大したことはしてねえよ」

「でも見ず知らずの人間を家に入れて看病してやるって、中々出来ないぞ！俺、相川に惚れ直すぜ！」

…そういえばそうだな。あのときは無我夢中だったが、何故か親近感が持てる奴だったな。…あいつもゾンビだとか？まさかな

「とりあえず、そういう事ならハルナに会って料理を作ってくれ」

「おう！じゃ、お邪魔しまーす！」

「お、ユキノリ来たか！早速やるぞユキノリ！」

「はい、師匠！」

楽しそうに台所に駆けてくハルナと友紀。それがとてもほほえましかった

「今日の晩御飯は『豚キムチチャーハン』だ！どうだ！天才とユキノリにかかればこんなの楽勝だ！」

ハルナが食卓に豚キムチチャーハンが入ったフライパンを持って来て、皆のさらに盛り付ける。今日の食卓は五人で囲むことになった。友紀が居るのは久しぶりだが、まあ今さら一人や二人増えても変わらないな。

俺の隣でセラが少し厳しい顔をしている。セラが里から帰ってきてから一言も話さず、ずっとこの調子だ。…ここは、少し肩の荷を下るさせなきゃな

「なあセラ」

「…」

話しかけてもいつものように罵倒してこない。随分余裕がない…セラらしくないな

「飯、ちゃんと食って元気出せよ？今日はハルナと友紀の自信作なんだから、ちゃんと味合わなきゃ…」

「歩」

セラが口を開いた。セラは少し悲しそうな雰囲気だ

「…彼は、私達吸血忍者…いや、ヴィリエや冥界にとっても影響を与えるモノの様です」

「…どういう事だ？」

ハルナと友紀はじゃれあいながらご飯を食べてる。あの様子じゃこちの会話は聞いてないだろう。ユーももくもくご飯を食べてるが、メモ紙に『続けて』と書いてあったから、ユーは話を聞いている。

…影響、か。まるでユーの心が動くと思えるような感じがするのだろうか？

色々考えてる間、セラは話を続ける

「彼はどうやら私達の世界には居ない存在…いや、居てはならない存在。イレギュラー…。故に、戦力として欲しくなる。あのメガ口との戦いを里の者が見たようです。圧倒的な炎をあやつりメガ口を死に至らしめた、と」

「でも、俺が来たときはまだメガ口は消えて…」

「歩が来る直前。メガ口の足掻きを受けた彼はメガ口の下敷きになったが、そのままメガ口は死んだ。という過程でしょう。ただ、とにかく言えるのは非常に強かった、と言うこと」

「…それで、頭領は？」

吸血忍者の頭領は俺も面識がある。ヴィリエの女王の呪いでブロックワードに触れると瀕死になる呪いをかけられたおっさん。だがあの人はあまり戦いを好んでるようには見えないから、あいつを捕獲とかは言わない…

「彼を消せ、という指令が下りました」

「消す…！？セラ、それは本気か！？」

あの頭領らしくない指令だ。どういうことだ？ セラはその理由を気分が悪いように話した

「今の内に叩かねば、我らを滅ぼしに来るかも知れないから、だそうです」

「あいつが吸血忍者を襲うとは思えないんだが？」

「だが、襲わないと断定も出来ないでしょう？」

「む……」

そういわれると返せない。確かに強大な力がどの勢力にもついていないなら、仲間に率いれるか、消すかの2択だ。そして、強大な力は時に自分自身を滅ぼす。そうなりたくないから頭領は消す結論に至ったって事か、全く家族思いなおっさんだな

「ただどあいつも生きてる。まずは起きて話を聞いてから動くじゃダメなのか？」

『死は、つらい。例え敵でも』

ユーがメモを見せる。ユーは冥界人だから死の重みを人一倍知ってるのだ。だとするとセラを止めたいんだな……。セラはユーのメモを見た後、目が泳いでいた

「セラ、無理はするな。無理な命令にまで手を貸す必要はない。……とにかく待て、セラ」

「……分かりました」

セラはあっさり引いた。最近セラは少しものわかりがよくなった気がする

「じゃ、アタシがあっちのバンダナにご飯持つてくから、アユム片付け頼む！」

ハルナは素晴らしい皿に豚キムチチャーハンを乗せ、あの男が居る部屋へ向かう。すると友紀が不安そうな目で俺を見てるのに気付いた

「どした？ トモノリ」

「相川、その男……本当に大丈夫なのか？ いきなり襲ってこないのか？」

友紀も途中から話を聞いていたらしい。俺は笑って返す

「ああ、あくまで直感だが、悪い奴っぽくは無い」

「相川が言うなら大丈夫なんだろうけど…」

するとドアが勢いよく開き、ハルナが出てくる。…どうかしたのか？

「アユム！大変だ、バンドナが居なくなっただ！」

「！？何！？」

あいつ…何してんだ！？あの傷じゃ起き上がるのもつらいだろうに！

「皆！悪いけどここに居てくれ！俺が行く！」

俺は無我夢中で外に飛び出した。何か、胸騒ぎがする…

「…寂れた町だな」

バンドナを巻いた男が呟く。傷が痛むのか常に苦しそうな顔をしている。そこに歩がやってきた。歩は息を切らせなら男に詰め寄る

「おい、お前っ！」

「…そういえば名がまだだったな。俺の名前は烈火瑠奈。世間体は普通の高校生さ」

瑠奈は口を緩めながら語る。だが歩はそのまま瑠奈の胸ぐらを掴む
「お前なあ！今の自分の状態見て分かるだろ！？無理できないって！」

「…相川歩と言ったか？」

瑠奈の目付きが変わる。おいおいまさかやる気じゃ…

「あれは、敵だな？」

「…何？」

歩が瑠奈の胸ぐらを離し、刺された方を向くと…そこには魔装少女に変身した京子が笑顔を向けていた

「…っ！」

「相川さん、会いたかったですよ」

「…俺はお前とは今、会いたくない。京子…何で脱獄してる？」

「脱獄なんて人聞きの悪い…仮釈放ですよ？だからその間に因縁を

晴らそうと思つて」

京子の目は既にヤル気満々だった。…くそ、やるしかないのかよ

「相川歩、ここは俺が引き受ける」

「!?!?」

「あら…貴方は、どちら様？私の邪魔をすると…ぶつ殺しますよ？」

京子が衝撃波を放つ。それは瑠奈に直撃のルートだった

「危ねえっ!?!」

「闇吸門」

うわあ、厨二病みたいな名前唱えて京子の技を無効化しちゃった！

…おいおい、ありかよそんなの。こいつ何者だよ！

「…悪くない」

「あら、変な邪魔が入りましたねえ…なら、貴方から殺しますよ！」

京子は火球を生み出し瑠奈に飛ばしてる。まずい、このままじゃ直撃…

「相川。俺は、普通じゃない。…それをもう一度見せてやる」

瑠奈は京子が生み出した火球を全て切り払った。…そんなのありかよ!?!

「あれを切り払うつて…そんなのありかよ」

「あり得るんだな、これが。俺は炎、闇の二重能力者だ。覚えておけ！」崩壊花火・砕”！」

瑠奈は炎をまとわせた剣で地面を叩き割った。そして周りは煙におおわれ、京子は俺たちを見失ったようだ。

「くっ…汚い真似を！」

「相川。ここは退くぞ」

「え？」

「俺は女は斬れない。それに、お前にとっては因縁だろ?…顔に出てるさ」

「まあ、そんな大袈裟なことでは無いさ。だけど町中では確かにやりあいたくはないな…仕方ない、あそこにむかうか…」

「む、あそことは？」
瑠奈が首をかしげる。まあ無理もないさ。あそこは普通は選ばれないからな

そして俺は瑠奈を引き連れ墓地へ向かう。瑠奈はこの地に入ってから、随分口をつりあげてる。…気に入ってくれたなら何よりだ

「墓地か…闇の力を感じるぜ…」

…厨二だああ…

そうこうしてるうちに、京子が追い付いてきた。胸元が少しはだけてる。…暑いのか？

「相川さん…やはり殺され願望でもあるんですか？」

「いや、俺はゾンビだからな。もう死んでるぜ？」

「ふふ…それもそうですね？だったらもつと死んでください…形が無くなるくらいにつ…！」

京子が火の玉を飛ばしてくる。それを瑠奈が俺の前に楯になるように立ち防いでくれた。…おいおい、さっきまで倒れてた人間なのかよ

「…行け、相川。火の玉は慌てなければ避けられる。僅かな熱を感じろ」

「んな無茶な…」「俺がこいつを斬り伏せても、こいつはまた起き上がりお前を狙う。なら、歯向かえないように分かせてやれよ、相川」

「アユム…っ!!」

そこにまたハルナがやってきた。手にはチェーンソーが持たれてる。ナイスだ！

「ハルナ！ミストルティンを借りるぞ！」

「おう！ぶつとばしてやれ、アユム！」

ハルナから受け取り魔装少女に変身する。よし、これで戦える

「小癩な…消えろっ！」

そんなハルナに衝撃波を放つ京子。だがその攻撃も瑠奈がハルナをかばい防ぐ

「やれ！相川あつ！」

「やつちやえアユムーっ！」

「おおおあつ！」

「っつ！」

その隙をつき俺はチエーンソーで京子に斬りかかる。京子はそれをもろに食らった。身体からは大量の血を吹き倒れる…が、そのまま京子は光に包まれ消えた。その様子はまるでメガロだった

「…京子は魔装少女のはず…」

「アユム、終わったなら帰るぞ！アタシはお腹空いた！」

「…だよ」

だがハルナは瑠奈に向き直り

「アンタも一緒に来るんだかな！バユムを助けてもらったお礼だ！」

ハルナはどうやらこの男を気に入ったらしい。…ハルナはもう一人じゃない、よかったな

「ほら行くぞアユム！バンダナもだ！」

「…ほら行くぞ、君？」

俺は瑠奈に手招きをする。瑠奈は仕方ない、と行った顔でついてきた。…あの京子が消えた謎が、これからの話に関わるとは…

「はい、彼は私と似てる」

「あゝ、こんにちわ。相川歩です。前日にメガロを倒す際、烈火と言った男が現れた。その男とあった直後に京子に似せたメガロが現れた。さて、これから何が起こるんだろうな…」

「歩、誰と話を？」

「ああ、ちよつと…ね」

「そう」

ユーはそう書き、すぐ目をテレビに戻す。今日はユーが毎週見ているバラエティ番組の日だ。感情を動かさずいけなただけ、やっぱり楽しいんだろうな

「歩、気持ち悪いです」

「…セラ、いきなり気持ち悪いは酷いだろ？」

横に座ってるのはセラだ。随分機嫌が良さそうにも見えるが、やはり言葉は突き刺さる

「…それにしても、あの男…」

「烈火…の事か？」

やはりセラも未だに引つ掛かってるらしい。どうやら吸血忍者には良くない人間みたいだしな

「大丈夫だ、あいつはいきなり吸血忍者を殺したりはしないさ」

「歩、何を根拠に言ってるんですか？」

「だってさ、ハルナが気に入った奴に、悪い奴が居ると思うか？」

あれからハルナと烈火は仲が良い。共にいきなり分からない土地に来たもの同士、気が合うのかも知れない。ちなみに今もハルナは烈火に貸してる部屋に居る筈だ

「ハルナはその男に丸め込まれてるだけではありませんか？ハルナを疑うつもりはありませんが、あの男はやはり信頼に足る人間だとは私は思えない」

セラは厳しい表情でそう答える。…うん、セラと烈火はやはり仲

良く出来ないのか？

するとユーが机を叩き、メモを見せてくる

『歩、ちよつと』

「…ん？ユー、どうした？」

ユーがその場から離れる。それに俺はついていく。…いったい何だ？

『歩』

ユーが来た場所、ここは墓地だった。…ここなら確かに他人は来ないな

「どうした？ユー」

どうもユーの様子が変だ。急になんでこんな所に呼び出したんだ？

『烈火について』

…烈火？もしかしてユー、何か分かったのか？

「何か分かったのか？ユー」

『いや、分からない。だけど、彼がこつちに来たのは私のせいかも知れない』

「…何でユーのせいなんだ？感情が動けば未来が変わるっていつてたけど…ユーの知らない人間の未来まで変わるのか？」

『分からない。私の力が彼に作用したかもしれない』

ユーが少し申し訳なさそうな顔をしていた。…あり得ない話では無いけど…

「とにかく、一回烈火君と話す必要があるのか？」

『私と話をさせて欲しい』

「ユーが？」

『歩に仲介をたのみたい』

ユーが珍しく俺に頼み事をしてきた。…よし、一肌脱ぐか
「分かった！！だったらいつにする？」

『今度私が指定する』

そして、その場の二人の話し合いが終わった。そしていえに帰ると…

「アユムーっ!!」

出迎えにハルナが来た。随分ご機嫌だな

「ただいま、ハルナ」

「アユム！やっぱあいつはすげー！ウイリエにはあんな奴はいいな！アタシの次に天才だ！」

なんか言ってる意味がイマイチ分からない。何をやってたんだ？

「あいつ、なにも無いところから火を出したり出来るんだ！すげーよな！」

メガ口と戦っていたときに出した炎の事か。…今回、それが問題なんだよな

「ハルナ、烈火はどこに居る？」

「ルナか!？」

…瑠奈？ああ、彼の名前だったな。めっちゃ仲良くなったんだな

「ルナなら今墓地に行くって言ってた！」

…墓地？

『歩、私と行く』

「ユー…分かった。ハルナ、セラと留守番頼むな？」

「ん？アユム、またどっか行くのか？」

少し不満そうな顔を見せるハルナ、だが俺達を止める事はしなかった。俺とユーは墓地に戻る…

墓地に戻ると瑠奈がそこで座っていた。遠目で見てもわかるが、何か憂いを帯びた顔をしているようだった

「ユー、何か話しかけにくくないか？」

『悲しそう』

ユーはメモにそう書いた後、俺を手で制して自ら烈火に近づいていた

『貴方は、異世界から来た、違う？』

「…」

烈火はその答えに口を閉ざしていた。…何だろう、初めて会った時のイメージと違うな…？

『私と貴方、似て非なる力を持つてる。だから私には隠せない』

「…そうらしいな」

烈火の目がユーに向く。敵意は無いが、冷たい目をしていた

「俺は…この世界の日本とは違う日本から来た。お前達から見たら異端分子に見えるんだろうな」

冷たい口調で烈火は言葉を続ける

「分かってるさ、セラフィムの心配も、ユークリウツドの危惧も…でも、俺自身悪いが今の状況はお手上げさ」

自嘲気味に烈火が笑う。…彼も考えてるんだな

『違う、私が心配してるのは、別。貴方、無理してる』

ユーが驚く内容のメモを烈火に渡している。…何の事だ？

「…さすがは冥界人、死に精通してるな。…この世界に無い分子の力だからな。いずれはまずい事になるだろうな」

『だったら私たちの魔力を』

「ダメだな。一時的には効果はあるだろうが、お前もつらいだろう？」

そうなのだ。ユーの力は絶大ではあるが、制御がきかないのだ

「…相川」

そこで烈火は俺に話しかけてきた。…俺も話にはいつて良いのか？

「なんだ、烈火君？」

「…ユーは、冥界一なんだよな？」

「…ああ」

「…少し、ユーと少し戦ってもいいか？」

「え？…なんでだ？」

俺は言葉の意図が見えない。出来ればユーにはそんな事をして欲しくない

「…ユークリウツドには分かっている筈だ。俺がこの世界に必要なかどうか…な」

その言葉を聞き機、ユーを見ると…ユーも無表情ながらやる気十分

だった

「…ユー？」

『大丈夫、殺しはしない』

…仕方ないか

「分かった。その代わり危なかったら止めるからな？」

「ああ」

『うん』

そして烈火とユーが武器を構える。…そして一気に双方の武器が交わる…って、嘘だろ！？今見えなかったぞ！？化け物か…？

「斬るっ！！」

烈火が間合いを詰め、刀を振り抜くとユーはそれを鎌で受ける。そしてユーは鎌で瑠奈を狩りにかかるが烈火はそれをかわす…その一つ一つがあまりにも常識はずれだった

「…嘘だろ…こんな…」

だが、その芸術的な戦いに水を注そうとするのが、一人

「ああ…隙だらけなネクロマンサー」

京子だ。既に光弾の発射準備が整っている

「京子か！やめろ！」

「相川さんの頼みでも聞けません。私はネクロマンサーの魔力をてに入れるのですから！」

そして光弾が発射される。狙いは、ユーだった

『っ！？』

ユーが気付いたときにはもう回避出来ないレベルだった。だが…

「ぐあああっ！！」

被弾したのは、烈火だった。派手な血飛沫をあげ、その場に崩れる。

…あいつ、ユーをかばったのか！？

『！？』

ユーも驚きを隠さない。烈火もユーと同様に戦いに集中してた筈、気付いてると思えなかった。そしてショックを受けてるのが、一人

「ルナ！！ルナーっ！！」

ハルナだ。どうやら知らぬ間にこの場の戦いを見てたらしい。慌てて烈火の所に向けよる

「ルナ！大丈夫か！なあ！？」

ハルナが動揺している。それを嘲笑うかのように京子がたたずんでいた。ユーの傍まで俺は歩き、京子に聞く

「…お前…」

「残念ながら外しちゃいましたね…彼からじゃ魔力は手に入らないのに…」

「やっていいことと悪いことの区別位つくだろ！何をやってるんだよ！」

烈火はハルナの呼び掛けに反応しない。流血が酷く、このままでは危険だった

「私に構ってる暇はあるんですか？彼、死んじゃいますよ？」

だがここでユーが前に出る。怒っていた

「あら、ネクロマンサー、どうかしましたか？私を殺す気ですか？そんな暇があるなら彼を…」

『人の命で、軽々しく遊ぶな』

この言葉が、とても重く感じた。ユーが、怒っている。他人の為に、だ

「ユーの言う通りだ。お前のやった事は人殺しだ…許されない」

「だから…相川さん？」

だが、ここで…

「黙れよな！！そして、早く消えろ！！」

この言葉で周りがしずまった。発したのは…ハルナだった

「ハルナ…」

「早く消えろって言ってんだ！！」

「あら…落ちこぼれの魔装少女が、吠えていますね？」

「お前が居ると、気分が悪い！消えろよな！」
だがハルナは仕掛けるそぶりは見せない。京子はそれにため息をつき、離れていく

「…仕方ありません、今ネクロマンサーを殺すのは不可能でしょうから、ここはひきましましょう。だが、次は覚悟してくださいね？」

そして京子が消える。どうやら今回は機を逃した、と見たようだ。だが誰もそれを気にしはしない。何故なら…

「げほっ！」

「ルナ！大丈夫か！？」

ハルナのダチの烈火が…重傷だからだ

あれから俺達は烈火をいえまで運んだ。運良く夜だったから人目につかなかったのが幸いだ。家に着くとセラに会ったが「…そうですか」と一言だけだった。どうやら理解はしてるようだった。そして烈火を横にすると、ハルナは「ふたりにしてくれよな！」といい、俺とユーを閉め出した。閉じ籠る間際、ハルナは泣いていた気がする…

『歩、彼はいい人』

唐突にユーがこのようなメモを見せてきた。…刃を交えた人に分かる物があるのか？

『彼を、しばらく家で守りたい、ダメ？』

ユーがまた頼み事をしてきた。…なら仕方ない

『ああ、分かったよユー』 『ありがとう』

ユーがそのメモを置くと、テレビに視点を移した。それと同時にセラが話しかけてくる

「歩、ヘルサイズ殿はやはり…」

「ああ、彼を守るつもりらしいぞ？そつちはどうなんだ、セラ？」

「頭領は以前のような関心は見せてはいませんが…やはり指令は変わりません。彼を殺せ、です」

「…それに従う気は？」

「私は紛いなりにも吸血忍者です。頭領の指示に従わないわけには

…」
「違う、俺はセラの意見が聞きたいんだ」

「…」

セラは諦めたようにため息を一息つき、話出す

「私は、彼を生かすべきかと。ヘルサイズ殿の意見もごもつともですが…あくまで私の勘ですが、彼を生かせば何か危険を回避できるのではないかと、と」

「ふ〜ん…」

「第一、ハルナがああ調子では、殺すのは難しいでしょう」

やはりセラもハルナの事を気にしてくれていた。やはりセラも家族なんだな

「そうだな、ハルナがあれだけ気に入った人間なんだ。それを攻撃しようかと思えばハルナはなんとしても止めるだろうな」

「ふふ…ハルナらしいですね。歩、ハルナの様子を見に行つてあげたらどうです？ハルナはあれからご飯も食べてないでしょうから、お腹も空いてましよう」

そういいセラは俺を烈火の部屋へ向かわせた。手元にはハルナと烈火のラーメンだ。それを持ちながら、部屋をノックする

「ハルナー？居るかー？」

「…アユムか？」

部屋からは小さな声が聞こえてくる。ハルナ、眠そうだな

「晩飯を持ってきたけど…はいつていいか？」

「…いいよ」

そういい、ハルナの部屋に入る。布団には烈火が寝ていて、その横にハルナが座っている。烈火はあれから目を一度も覚ましてないよ
うだ

「…今日はラーメンか？」

「おう。あまり時間が無くてな…不満か？」

「いや、いい」

そういいハルナはラーメンを食べ始める。やはりお腹減ってたか
「…アユム、こいつ、死んじゃうのかな」

ハルナがぼつりと洩らした一言。この言葉の意味を歩は知っていた
「…いや、こいつは絶対目を覚ますさ」

「やっぱり、アタシと関わると、皆こうなるのかな…」

いつもの様な元気は無い、箸を持つ手が震えている

「…コイツも、友達になれると思ってたのに…」

ハルナの目から涙が溢れていた

「ハルナ、お前が諦めちゃダメだ。こいつは必ずまた目を覚ます。
間違いなくな」

「…アユム、何でそんなに自信ありげなんだ？」

「なんとなく、かな。ユーがなんか自分と似てるって言ってたし、
普通じゃないんだろうから、簡単に死にはしないさ」

「…根暗マンサーと似てる？」

「ユーはそんな感じがするらしいぞ？それに…ハルナと同じく、セラもユーも、俺も皆、コイツには目を覚まして欲しいんだ。これだけの想いがあるのに、死んだら薄情だ」

「…そーかもな！天才のハルナちゃんがこれだけ心配してるんだ、
覚まसानかつたら殺すかんなっ！」

とんでもない無茶を言うハルナ。でも少しは元気になったみたいだ
「じゃ、食べ終わったら器を廊下に置いといてくれ？後で取りに来るからな」

「分かった！！」

そーいい部屋を後にする

…ハルナに取って、いい出会いだっただみたいだな

これから、烈火が共に住むって言うのも、悪くないのかもな…

後で器を取りにいくついでに、部屋をのぞいてみると、烈火に被さ
って寝るハルナの姿があった。さすがに眠かったんだな

「…仕方ないな」

ハルナに毛布をかける。風邪なんか引いたら看病される側になっち

やうからな

そして居間に戻るとユーがお茶をすすっていた。セラの姿が無いところを見ると、寝たのかな

「ユー、寝ないのか？」

『歩、変な感覚がする』

ユーがなにかに気付いたみたいだ。ただ、ユー自身も良く分かってないみたいだけど

「ユー、じゃあ俺はどうしたらいい？」

『学校へ』

そう書き、俺の手を引くユー。いったい何が…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2581z/>

これはぞんびですか？～はい、二次創作です～

2012年1月2日09時51分発行